

南蠻様蒔繪器物の一種に就て

吉野富雄

南蠻の渡來は天文十二年八月廿五日葡人の種島漂著に始まり、翌十三年再來して鐵砲の製法を傳へてから、貿易と布教のため頻々として

來朝し、二十七年後の永祿十三年には信長の保護によつて京都に南蠻寺を建立するに至つた。爾來耶蘇教の弘布は益盛になつて天正十五年六月十九日、太閤が彼等に異圖あるを看破して南蠻寺を毀ち教徒を追放した時には、宣教師三百人、寺院二百五十、信者三十萬に及んだと云はれ、以て當代に及した耶蘇及西洋文化の淺少なからざるを窺ふことが出来る。而してその顯著なる者には鐵砲や教具の外、城廓の建築、煙草の飲用、各種遊戯の傳來、猩猩緋の敷物、帽子の流行、油繪法の模倣等殆んど枚擧するに遑なく、それによつて新たに興つた美術や工藝の探求は吾等に取つて一種の新鮮味を供するのみでなく、當代に於ける外來文化の消化力を検討する資料となり、因つて現代思想に對して一大明燈を點じて居る事が知られる。今、蒔繪に現れたる所謂南蠻様なるものを檢出すると、一、南蠻人物の蒔繪。二、南蠻事物の蒔繪。三、耶蘇教文様の蒔繪等となり、その表現様式は不思議にも倭繪風で

南蠻様蒔繪器物の一種に就て

あつて、これに南蠻風唐草、朝鮮式の螺鈿が加味された一種の異風に成つて居る。

さて從來世に知られた南蠻様蒔繪品は極めて少數であつたが、近年になつて桃山蒔繪の鑑賞熱が昂まるにつれて、種々異調品の出現して來た事は斯界の爲に甚だ慶すべき事である。左に最近重要美術品に列せられた小林一三氏所藏の珍物、南蠻様ケースを主題とし、是に關係ある二三例證を擧げて簡單なる所見を述べんとするものである。

一、花鳥蒔繪南蠻様ケース

小林一三氏藏

横一尺七寸 竪八寸一分 高一尺一寸

長方形腰高の箱に蒲鉾形の蓋あり、蓋身共花文の毛彫ある金銅隅金物を打ち、蓋は背面に着けた二枚の蝶番によつて開閉し、左右兩側に提環がある。全體黒漆にして各面毎に南蠻唐草の縁模様を施し、前側には桔梗に飛雀、蓋甲には菊に朝顔を對き合はせ、後側には葛、左側には萩桔梗、右側には姫菜の圖を蒔繪し、總て異調があつて古き箱書に「和蘭文庫」と題せるも尤と肯かれる。蒔繪は金と銀の平蒔で所

所に青貝を點綴し、葉脈には金の毛打と黒漆の線描と針刻とが併用されて居る。構圖も亦頗る巧妙で前側の桔梗の如き左邊より二莖を傾かせて大形の飛雀を配し、右邊には三莖を直立的に畫けるなど、全く圖案的原则を活用した者と見做される。その筆觸は大和繪風にして殊に

花鳥蒔繪南蠻様ケース側面

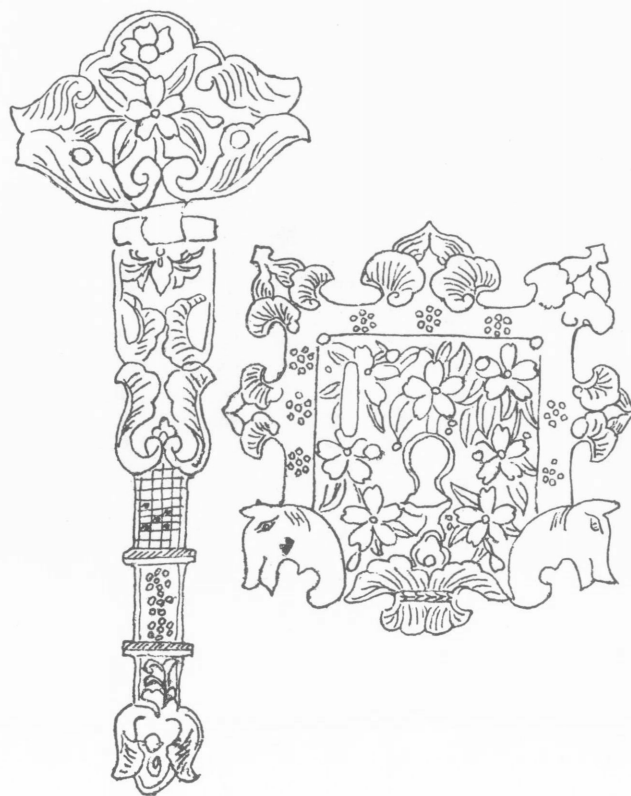
東京 小林一三氏藏

蓋甲の菊と朝顔に於て面筆特有の柔軟美が發揮され、又内部には淺き懸子を架し、半筒形の蓋裏には朝顔の絡んだ一莖の芒が平時に描かれて居る。殊に奇しきは金物で隅なるは中心に花菱を描き、その花瓣の間から櫻の枝が左右に伸びた圖で之れを展開すると全形は十字花狀となり、鎖鑰は更に奇形で蓋より垂れたる竿鍵さしあきは菱形の座金から蝶

番にて垂下し、身に着けた方形の座金に接着する装置だが、その形状と文様とは櫻花を除けば全くの洋風である。而してこの函が如何なる用途に充てられたかは不明であるが、之れより小形の者一個が曩に伊藤甲子之助氏に所藏されて居る。又この函には籐編の外筐があり、そ

花鳥蒔繪南蠻様ケース鎖鑰文様

東京 小林一三氏藏



れには縦横の區劃と王冠形とS字形の文様と西班牙風の文字とを編起して内部には竹の網代を合せてゐる。文字は人名らしく思はれるが、鐵物の單純性から察すると筐は南洋の所産らしく、或は一二回の渡航を経た者かも知れない。而かも本品は松平周防守の舊藏と傳へられる。なほ本品と系統を同くする蒔繪には、根津家の飾臺と、伊藤甲子

之助氏の西洋雙六盤等があるが、小林氏所藏の聖餅筥こそはIHSの記號を存する事に因つて南蠻との明瞭な關係を物語る者である。

二、花鳥蒔繪南蠻様飾臺

根津嘉一郎氏藏

竪一尺二寸四分 横一尺四寸三分 高七寸八分

方形黒漆の臺でその蓋と四側の五面を通じて二重の額縁形を附け、之れに金銅花形彫の隅金物を打ち、蓋甲には紅葉に菊、前後兩側には藤、左側には橘、右側には竹に雀を蒔繪し、それらには各各螺鈿鋸齒文の中枠と、南蠻唐草の縁枠蒔繪を施し、額縁には更に南蠻様の線唐草が蒔かれて居る。蒔繪は悉く金と銀との平蒔で所々に針刻が施され、遒勁なる蓋甲の楓は例の桃山屏風の筆致を傳へ、寫生味ある藤、畫面一ぱいに適住させた橘と竹に雀の蒔繪等皆桃山様式の濃厚なるものが見られる。全體に於て小林氏のケースに酷似する者であるが、就中その隅金物の如きは中央に花菱を描きこれに櫻の枝を配した所など全く同一作家の手に成るかと思ふばかりである。此の臺も亦何の用に使はれたか知れないが聖餅筥の例によりその南蠻好の器物たるは疑ふべくもない。

三、住吉清水蒔繪南蠻雙六盤

伊藤甲子之助氏藏

竪一尺七寸五分 横一尺五分 高二寸九分

長方形の浅い箱で蓋身共同形にして、蝶番を以て兩開きに綴ぢられ各々表面四隅に直径五分位の銀製球鉾を打つて、文飾の直接磨損することを防いで居る。その構造は恰も西洋のトランクの如くで一見南

花鳥蒔繪南蠻様飾臺外筐 京東 小林三藏氏

蠻風のものである。而してその一面には螺鈿と平蒔にて社殿、塔、球橋、鳥居、樹木及行路の人物を描き、他の一面には堂宇、塔、寺門、樹木、人物があり、頗る妍爛の美を極めて居る。即ち前者は住吉神宮にして、後者は清水寺を描ける者である。畫風は大和繪ながら技巧に異調ありて周圍の縁枠文と側面の葛文とは全く朝鮮式である。又内部を展開すれば箱の口縁は螺鈿蒔繪の霞文を以て飾り、更に内側は南蠻唐草ある額縁造となし、内底中央には丸に梅鉢紋と七寶繫の帶飾があり、その上下には螺鈿と朱漆で描いた六個づゝの松葉形堺線がある。こは即ちゲーム用の爲で、二三外人の説を徵するに Back Game-board と云はれた。それにしても西洋では無地

物で此の如く裝飾された者は見ないと云ふ。思ふに元和三年ウィリアム・アダムスの書簡に見るが如く、是等の器物は日本蒔繪愛好の意味から、特に施巧させたものらしく、その文様技巧の異調なるは工人の好奇心が巧に外國風の趣向をこらしたものであらう。

四、秋草蒔繪聖餅筥

小林一三氏藏

徑三寸七分強 高三寸

印籠蓋造りで櫻材堅木の挽物木地に黒漆を加へ、底少しく上りて器物の有ゆる輪廓線に西洋式の曲線味が現はれて居る。而して蓋甲の中央には螺鈿のIHS記號及花クロスと釘とを嵌して蒔繪螺鈿の圓光を附し、その周圍にも同じき鋸齒文がある。又外側は蓋にも身にも上下に金蒔の横線を劃して、蓋髪には枝桐文を周らし、身には萩、桔梗、姫菜を描く。しかも所々に青貝斷片を嵌し、平蒔繪を以て花も葉も悉く金蒔と銀蒔とに描き別けられ、底近くには線唐草を描き、總て桃山様式に成る異國風を發揮したものである。聖餅筥とは耶穌教の聖餐式にパンを納むる器で、パンは耶穌の肉を意味し、その血に象れる赤酒に浸けて食する時の儀式具なりといふ。IHSはJesus Hominium Salvatorの略語「耶穌。人類の救濟者。耶穌會の紋章」等の義で一五七七年の銘ある南蠻寺の鐘やその他類例は多い。聖餅筥は此の如く耶穌教具として確證あるが故にその異調の蒔繪は此種南蠻蒔繪の試金石として第一に推す可き者であらう。聖餅筥は現在四合あり、水戸家所藏の物は本品と文様相類し、昭和十一年八月八日予が發見した東慶寺の物は葡萄を蒔繪し、家藏の物は葛の蒔繪である。

以上を綜合して南蠻様の特徴を摘出すれば、繪風は大和繪にして、南蠻の唐草と朝鮮の鋸齒文とを配し、金銀の平蒔に桃山風の針刻を施し、且つ蒔繪上一面に油色を施した様な觀がある。油色とは文様上に

乾燥性の油を塗つたもので、古く奈良朝に行はれた技術であるが中世跡を絶つたもので、この頃行はれたとすれば新なる外來の手法である。

なほ南蠻様式は時好に投じて蒔繪の各方面に浸入し當代の蒔繪をして新鮮、潑刺の快調を呈せしめたが、こは偏に當代國民の旺盛なる氣力と、偉大なる消化力との致す處で、後代國民に好範を示したものである。而して南蠻様蒔繪も研究の結果今日では各種多様の例證を挙げられるが、茲にはその最も直接的なる一種の標本を語るに止めた。

最後に元和三年十月頃堺發ウイリヤム・アダムスより平戸のリチャルド・ウイ

花鳥時繪南蠻様ケース

東京 小林一三氏藏

花鳥蒔繪南蠻樣飾臺

東京 根津嘉一郎氏藏

住吉清水蒔繪南蠻雙六盤蓋表

兵庫伊藤甲子之助氏藏

秋草蒔繪聖餅宮

東京 小林一三氏藏

ツカムに贈りし書翰の數節 大日本史料 十二ノ廿八 は讀むに従つて此間の狀況を明示するものである即ち「予は此書狀携帶人にRWの記號を附せる計算机及び文机十七包を託送せり。其舟積賃は何程にても貴下より支拂はれ度く、予の使傭人善吉は其幾何なるか貴下に確報すべし。予は都に行きて蒔繪師と會談せしが、彼は近々作り上ぐべき事を約したり。彼は晝夜働く職工五十人を有し、予の見し處にては彼は其力を盡せるが如し。予の都に在りし時貴下の燭臺は未だ仕上られざるも二三日後に予に送る事を約したり。然れども予は未だ受取らず、貴下若し 中略 買入れたるものあらば之を持參することをば善吉に命じ置たり。」
「貴下の印籠は助五郎都より予に送るべしと語りたるが、若し彼之をなさば予は之を貴下に送るか、予自ら貴下の所に持參すべし。」と、そのRWの記號を附せる計算机及文机と云ひ、燭臺と云ふ、皆實用的の大器に屬する所を見ると、現存の諸器も亦京都に於て職工五十人を有した大蒔繪師の工場で作られた者が多いであらう。蓋しその作風が大體一定の形式にはまれる事を以て察せられる。(一五、一、二六)